とえばエリート構造の解剖（pp.60～71），政府諸部省による企業経営の説明（pp,184～5），軍隊の性格規定（pp.191～2）などの個所，さらには第7章の国会の機能の説明，そして，タイでもっとも重要な権力集団としての khana の存在の指摘（pp.246～52）などの個所では，著者が，もはや凡庸なタイ研究者の及びもつかぬ域に達していることを否応なしに感じさせられる。Wilson の強みの一つは，タイ語に通暁していることであろう。かれの語学力の非凡さは，一通りタイ語を学習したとてふつう容易に正しく発音できるものでない個有名詞をば，かれが一切正しい発音通りに表記しきっていることからも，その程が判断できる（かれは，たとえば ananda, vajiravud, nagara svarga, phyabahol をそれぞれ anon, wachirawut, nakhon sawan, phraya phahon と正確に書き換えている。ただし pramoj は pramot ないし pramod とすべきではなかったか？）。

ただ，Wilson は，どちらかというと，非歴史学的研究を得意とするが，望むらくは，いま以上に歴史学的問題意識を研究の土台に踏まえてほしいものだ。タイ政治は，なるほど不変の政治文化に支えられ，少なくとも32年革命以来，政治にさしたる質的変化を見てはいない。とはいえ，政治構造の静態的な把握をなすにしても，動態的変化にたいして神経過敏であるに越したことはないのだ。静態的な把握は，当該政治構造の凍結したイメージをつくりあげやすい。むしろ，それは，反面に動態的把握の意欲に伴われてはじめて，真に意義を担いうるものである。Wilson に今後期待する面が残されているとするならば，それは，本書ではまだ充分に尽くされてはいない経済構造の変化，政治家のパースナリティの研究などを加味した上で，タイ政治に変化の契機をみつけてもらうことであろう。歴史学的考察を加えることにより，かれの構造分析の成果とて，より深みを増し，より有機的に内部的意味連関性を備えることになるに相異ない。（矢野　暢）

J.H. Kautsky (ed.); Political Change in Underdeveloped Countries: Nationalism and Communism, 1962, John Wiley and Sons, Inc., *xv+347*

本書は，大きく二部にわかたれている。前半は編者 Kautsky が書き下ろした An Essay in the Politics of Development という論文であり，後半は，新興地域政治について書かれた既成の論文を12編集纂したものである。その12編は，いずれも充実した内容のものであり，編者の見識の高さを自ずと示している。しかし，本書の存在意義を高からしめるのは，やはり，冒頭の編者自身の論文である。これは，新興地域における共産主義と民族主義との関連を理論的に論じた数少ない論文の筆頭に数えられうべき好論文である。

著者の論点を一つにしぼると，the convergence of Communism and nationalism (pp. 79～89) ということになろう。著者は，この結論的主張を導き出す過程で，少なくとも次ぎの3つの命題を提示している。(一)，新興諸国の政治を動かす基本的要因は，通常階級と称せられる利益集団である。階級間の利害の相克こそ，そこでの政治の主題であり，ひいては近代化のエネルギーの源泉をなす。(二)，新興地域においては，民族主義と共産主義とはまったく同質の状況から生まれ，従って，両者の目標も運動を担う層も基本的には同質的である。(三)，民族主義と共産主義とのイデオロギー上の差異は消失し，民族主義者と共産党との競合対立も消滅する趨勢にある。

著者の結論は，歴史発展の試行的読みとして興味深い。上記三命題のうち，とりわけ第二点に関しては，誰しも首肯するにちがいない。ただし，残り二命題については，異論の出る余地があるようだ。まず，階級関係のみで新興諸国の政治を割り切ることは，あまり感心できない。階級関係に規制されつつも，それからある程度自由な立場で政治を嚮導する，政治的指導者の創造力や政治理念や社会的性格とかが，もっと重視されてしかるべきであろう。また，民族主義者と共産主義者との接合をそう簡単に必然視することは妥当でないと思える。新興諸国のこれまでの例では，民族主義者が，共産主義の実質的内容を先取し，しかも非共産主義的政体でそれを実現していくばあいが多い（たとえばビルマ）が，Kautsky はかかる現実を説明ずけることができない。

しかし，このような疑問点にも拘らず，かれの立論は全体としてすばらしい説得力を有している。新興諸国と共産主義との因縁をこれほど明快に説いたものはあまりいまい。その意味で，本書は，新興諸国の広義の近代化に関心を寄せるものが，一度は目を通していい文献であるといえる。なお，Kautsky は，ワシン

トン大学で政治学を教えており，現代共産主義問題の専門家である。（矢野　暢）

O. Gordon Young; The Hill Tribes of Northern Thailand, Siam Society, Bangkok, 1962 ***xiv+92.***

著者 Oliver Gordon Young 氏は本書の序文によると，バプチイスト宣教師 H.M. Young 氏の子として1927年雲南の山奥に生れ，ラフ族やワ族などの間で父について幼小の時代を送ったという。ヤング氏の祖父も宣教師としてビルマ北東部に生活した人で，3代に亘って山地民族と共に生活しているという。幼時すでにワ語，シャン語，カチン語，雲南語，ラフ語などを解したという。ビルマとインドで教育を受け，カリフォルニアのポリテクニック大学で牧畜の研究をしている。現在タイのチェンマイに住んでいる。北部タイの山地民族を自分自身の未開人への接触と，それらから得た知識によって書いた書物であるという。近年タイ北部の山地小数民族には社会的文化的経済的変化が劇しく，殆どが焼畑耕作民で短いものは5～6年，長いものでも，10～15年で移動する外に，チェンライ地方の Lahu Shi 族や，チェンライ，チェンマイ地方の Haw 族のように外部から近年移動し来ったものもあって，その研究は容易でない。本書にはこの近年の動向が示されている点で極めて有益である。取扱われている民族は，Blue Meo, white Meo, Gua-niba Meo, Skaw Karen, P'wo Karen, B'ghwe Karen, Taungthu, Akha, Yao, Lisu, Haw, Lahu Nyi, Lahu Na, Lahu Shehleh, Lahu Shi, Kha Htin, Kha Haw, Kha Mu, Lawa, Phi Tong Luang (Yumbri) の諸族である。個々の民族の記述は，系統，住地，人口，言語，宗教，村落，体形，経済，外部との接触，社会的慣習，村落統治，近来の動向の順序で書かれている。人口は全体で 217,000 というが，個々の民族の人口など家族数，村の家数，村の数などから一々推計されている。又言語についても言語系統の外に例えば Akha 族はロロの影響を受けたチベット・バーマンであるが，ラフ語70%，雲南語25%，ラオ・タイ語25%というように現在の実状が示されている。唯集団内部の社会構造についての分析は十分には示されていない。そして勿論個々の民族について割かれている頁数も多くはないので，夫々の民族誌という訳にも行っていないけれども，外部から之等の民族に接触しようとするような場合には無二の手引となると思われる。多数の写真，8葉の表，6葉の地図も挿入されていて，楽しく読める書物である。（棚瀬襄爾）

Phya Anuman Rajadhon; Life & Ritual in Old Siam, three Studies of Thai Life and Custom, HRAF Press, New Haven, 1961 ***pp. 191***

本書はアヌマン・ラヂャトンの3つの論作を集成した 191 頁の小著である。アヌマン・ラヂャトン氏には評者も面会したことがあるが，温厚の碩学で，チュラロンコンの前教授であり，もともとアカデミックな教育を受けたことはない由であるが，タイの民俗，文化については最も学識高き人として尊敬されている。三つの論作というのは〝農民の生活〟，〝タイの民衆仏教〟，〝出産及び育児に関する習俗〟である。〝農民の生活〟は1948年の作でタイ語で出版されたもの，〝出産及び育児に関する習俗〟は1949年に同じくタイ語で書かれたものが，ミシガン大学のタイ語教授である Dr. W.J. Gedney 氏によって1952年から苦心して英訳されたという。〝タイの民衆仏教〟はアヌマン・ラヂャトン氏自身が英文で執筆したもので，タイ研究で名のある Dr. Robert B. Textor がまとめて出版することをすすめて収録せられたという。ライフ・サイクルの中で結婚や死，或は病気等に対する民間療法などが十分取扱われれば，タイの民衆生活のうち重要な点は皆この書物で了解しうるわけである。タイの村落研究などこの頃では随分出ているが，タイの学者の書いたもので我々に利用しうるものは極めて少く，恐らく本書はタイ研究者の必読の書となるものと思われる。著者，訳者，助言者共に面識を得ている人々の作った書物というものも珍らしいので紹介したのである。アヌマン・ラヂャトン氏にはこの外 Cultures of Thailand (Thailand Culture Series, National Culture Institute, Bangkok, 1953) という著作もある。（棚瀬襄爾）

R. M. Koentjaraningrat; Some Social Anthropological Observations on Gotong Rojong practices in Two Villages of Central Java, Cornell Univ. Ithaca, New